

(地域名) 清流に白雲うつって涼やかに、庭先の向日葵夏空仰いで凜々しく立ち、青きカワセミ川面を見つめて暑さに憂う。やがて日は暮れ、静かに遊ぶ街の子供ら、線香花火の炎を散らして婆さん思い、夜の鈴虫寂しきその声、諸行無常の理を知る。それ惟んみれば、新帰元 俗名を(個人名) 事転じて(戒名)。多くの姉妹に囲まれて賑やかに育つ 長女のしっかりものの律義者、誠実にして地域の新風をもたらす夫を迎えて家督をつなぎ、家族を築き、献身慈愛を尽くして真心尽くすまさに純実として勤勉、頭脳明晰で品位あり、(地域名)の(苗字)家礎となる。

質素の中に喜びを知り 自然の中に優雅さを感じて 春の東川面の桜の開花に感動し、夏の熱き日も草取りに励んで休みなく、秋の稲穂たれる収穫実りの喜びを知り、冬の寒き日の手の冷たさに耐え忍び、謙虚にして品を知り 言葉の中に優しさと信念伝え (地域名)の故郷に生涯を支けて心を養う。しっかり者の律儀者の永久に響く命にも老いあり最後あり。痩せて小さな丈夫な体、ゆるやか体力奪われて、終も(地域名)生家を選び、猛暑身に響き、いよいよ阿弥陀如来の迎えを感じ、最後の晚餐美味しく済ませて、娘の手を取り献身看護の感謝を伝え、八月五日、和尚の修行に最後まで気を配り、盆前日程少し空く絶妙の日に、眠るがごとく黄泉へと旅立つ。ただ、人亡くなるは時節因縁 夏の暑さもやがては涼しきに移り変わり (地域名)の川の水もやがては、太平洋に注ぎ込むが如く 誰しも迎える大自然 当然の理にて、今はただ苦しみをなくして写真の(戒名)は笑顔で微笑み 香にたかれて蓮華台上目前に静かに横たう。つまりは大往生なること疑いなし、いえども 遺族に別れの寂しさあつて悲しみの憂いあり応えて和尚一句一喝によって送別す 諦聴 諦聴

寺に清らか百日紅 紅の花満月にかんざし 東の(名前)さん静かに送る 喝